

今、日本農業新聞にコラムを連載しているんですけど、以前、私が安心院を取材したときに感じたことですが、安心院には「一度泊まれば遠い親戚、10回泊まれば本当の親戚」というキャッチコピーがあります。修学旅行で2泊3日の体験をした女子中学生が帰り際、農家さんと別れ際、何でこんなに涙が出るかわからないというぐらい感動したというんですね。それは、その農家のお母さんたちと2泊3日ずっと一緒に、農作業したり、御飯つくったり、体験するなかで、お客さん扱いではない、一緒になってシェアするという、迎えてくれる家族がいつもいる、居場所があるよ、ふるさとなんだ、あなたのホームなんだという、農村の持つ包み込む大きさ、そういうものが感動をもたらすのだと感じました。



日本農業新聞2018年1月9日付

視点を変えると、むしろ、農泊が都市を救うのではないか。農村が都市の課題を解決できるのではと
考えています。つまり、自分の居場所ということですね。都会ではなかなか自分の居場所がない、心の
問題やストレスや鬱を抱えるなど、命のそういう問題を、むしろ、農村が解決できると。

農業・農村が 都市の課題を解決できる

息抜き・自分の居場所・役割

農村の価値とは物質だけではない、生産物だけではない。人間の心を癒す力があるんだ。物より物語、農産物より農村の物語に価値がある。今、TPP、EPAで本当に外国のものが日本に押し寄せてくる、そういう時代ですけれども、大規模化して国産を維持しようとしています、農村の物語自体を売る視点があれば、それは他のどの国にも負けないよということです。

中山間地、小規模
家族農業 小さな農
「農村の価値」とは？

規模、量より

物質ではなく心を満たす

モノが売れない時代

ストーリー(物語)を売る

農村ツーリズム・農泊・農体験で
農の価値をあげる

私は農業ジャーナリストと同時にフリーのアナウンサーをしています。NHKのEテレで、「介護百人一首」という番組の司会をしています。毒蝮三太夫さんとやっている前向きな介護の番組なのですが、先ほども茂木町長がおじいちゃん、おばあちゃんのお話をされましたけれども、埼玉の秩父の山間部のおじいちゃんを訪ねたときに、100歳でも自立して生活されていました。自分でくわを持って耕しておられました。農業という仕事は定年なしなんです。人生100年時代、こういうおじいちゃんなら介護は要らないわけです。



**健康長寿
生涯現役 定年なし**

100才で自立！

NHK Eテレ
「ハートネットTV 介護百人一首」

NHK Eテレ ハートネットTV 介護百人一首

いろんな農村を回ってきて、自分の仕事、自分の役割、居場所を持っているお年寄りは、100歳でも介護される側ではないんだ。生産する側なんだ。人生100年時代、生涯現役でいられると感じています。



小谷 あゆみ 氏撮影

鳥獣害の話、耕作放棄地、さつき、箱罫の話が出ましたけれども、本当にそういう現場でスマート化が大事だなと感じています。

この間、南房総のイノシシ狩猟塾というのに行ってきました。

おコメを食べない時代ですから、田んぼでコメをつくらない。耕作放棄地に牛を放ったら、イノシシは来ないという話があるんですが、イノシシは牛の放牧地に来ていましたね。(笑) 冬場は牧草がないので、農家さんが籾つきの飼料稲を毎日夕方やりにくるんですが、それをちゃんとわかって、夕方になると牛とイノシシが共生して御飯を食べている状況を実際にこの目で見ました。なかなか難しい問題で、また後で話します。



今日、お題としていただいたスマート農業、農村のデジタル化ということですが、儲かるビジネスと住みやすい農村、両方かなえるにはどういうふうにしていったらいいのか。

今、何となくスマート農業で感じることは、人手のかからない、もう人は要らないよというような農業のIT化が多いと思うんですけれども、やはり農村という人の住む場所を大事にしたいという視点からいきますと、高齢者でもいい、今やっている人がもっと頑張れる、楽しくなる、あるいは元気になる、そういうハッピーで持続可能な開発をしていただきたい。

強い農業・農村とは

日本の農業の最大の特徴は 地域らしさ

**日本らしさ、地方らしさ、村らしさ
個性＝オンリー1、真似できない・強み
強さ＝多様性
自然災害に強い＝リスク分散**

あるいは今やってない人も、楽しそうだから、そこに参画したくなるような、そういう関係人口の創出にもつながるような、効率性、経済性ではない、新しい切り口でのIT、スマート化を、答えはまだないですが、期待しています。

以上です。(拍手)

(井熊) 小谷様、ありがとうございました。

ここまで四方のお話をいただきました。簡単にポイントだけまとめさせていただきます。

まず、古口町長のお話ですが、私は茂木町の素晴らしい運営を見て、きっと古口町長はどこかのすごい先進企業の社長だったのだらうなと思っていたのですが、決してそうではなく、ちゃんと農業とか特産品の販売とかそういうものを地域発で回していける、そういうようなことのお話があったと思います。

深山様には、銀行員から転職されてというか、故郷に戻られてから2年間でここまでできているというお話をいただきました。やはり農業において他の分野で培われた知見というのは大変役立つのだらうなという印象を受けました。

稲田様には、農村DXで、今日の言葉でいえば、DXの技術の日常化というものがものすごいキーになるということを感じました。

最後に小谷様のお話では、両立や補完関係のようなものが、農村と都市、それから儲かる農業と住みやすい農村にはある、というものが大変印象深かったです。

三輪さん、この四人の方々のお話を受けて、何かコメントがあればお願いします。

(三輪) 皆さんにお話しいただいたことを聞いて、ああ、私が考えていることは皆さんと同じなんだなと安心しました。非常に心強く感じました。

農村とか農業というのは本当にいろんなチャンスがあるんだな、というのを実体験で皆さんからお話しいただきました。ただ、こういうふうな成功事例、こんなチャンスがあるのに、何で農村ってまだまだ難しい、厳しいと言われてしまうのか。農業って儲からないよねと、いまだにそういうレッテルを張られてしまうのか。この部分は、ぜひこの後の時間で、皆さんのお力をかりて解きほぐしていきたいなど。

その中で、デジタル化って、どういう視点で入れると、非常に心温まる農業、優しさあふれる農村というのが実際に今後も持続できるのか。そういうようなお話をぜひ聞いていきたいなというふうに、感想ですけれども、感じました。

(井熊) どうもありがとうございました。

それでは、これから皆さんにいろいろお話を伺いながらディスカッションを進めてまいりたいと思います。

テーマは三つ考えておまして、一つ目は、儲かる農業をどうやって実現するかという話。二つ目は、農村の魅力について。三つ目は、農村はデジタルトランスフォーメーションの発信の起点になれるのではないかというようなことであります。

一つ目でございますが、いろんな考え方があっても、農業が全然儲からないということではなかなか話が始まらないのかなと思います。そういうことで、まず農村で儲かる農業を本当に実現できますか、ということにつきましてお話を伺っていきたくと思います。

まずトップバッターで、銀行員から転職されて2年で、儲かる農業実現に、今、恐らくいろいろ悪戦苦闘も含め活躍されている深山様からお話を伺いたくと思います。

(深山) 農村で儲かる農業について、2年、3年奮闘しておるところですけども、一番課題としてぶつかっているところは、結局のところ、やはり人ですね。実際、農作業をする人は農村にはたくさんい

ます。高齢の方もいらっしゃいますし、若い方も意外とたくさんいらっしゃいます。ただ、結局、儲かる農業をするためには、組織にして、筋肉質にしないとイケない。組織にするときには、作業する人だけではやはりだめですね。

つまり、皆様のおられる組織でもそうだと思いますし、世の中の中小企業でもそうなのだと思いますが、経営者と実際の作業をする人の間に立つ、中核になる人材ですね。これがやはり極めて重要なのかなと思います。とくに私なんかはずっと東京で働いてきて、どちらかという、ロジカルに考えないといけないというふうに言われて育ったわけですがけれども、実際、農村で作業しているみんなは、生き物であるシイタケですとか野菜、動物と毎日毎日対峙していますので、ロジカルではなくて、どちらかという、臨機応変にキノコの感情を読みながらというところにもなってきたりしている。そういった意味では、経営者のロジカルなところと現場のみんなの感情的なところをうまくミックスする、融合するような人材、真ん中に立つ人材というのが大事だと思いますし、それが、現状、とても不足していると感じております。

(井熊) どうもありがとうございました。

私ども、作業する人自体がすごい足りないのかなと思っていましたら、これは場所によって違うと思うのですが、そういう人は意外といて、やはり儲かる農業の仕組みを管理したり運営したりする人、そういう人が不足しているということですね。

その意味で、深山さんは銀行でまさしくキャッシュフローみたいなことに関してもプロとしてご活躍されたと思うのですが、そういうご経験は役に立っているという感じですか。

(深山) そうですね。銀行で勉強したキャッシュフローですとか、そういった財務諸表を読む力、あと営業力というのは、非常に役に立っております。繰り返しになりますが、それを実現するために現場を動かすところ、そこはやはり不足しているなど感じる場所ですね。

(井熊) どうもありがとうございました。

それでは、次に古口町長、お願いします。

今、深山さんは銀行から農業のほうに転じられた視点でお話を伺いましたが、古口町長は長年自治体のトップとして地域づくりとか儲かる農業も推進されてきたと思います。その意味で、農村で儲かる農業が実現できるかという点についてお話を伺えればと思います。

(古口) 私は、それは実現しなきゃだめだと思いますよ。ちょっとこれは小谷さんにお言葉を返すようになっちゃいますが、楽しい農業というのはありません。私はそう思っています。いいものをつくって、お客さんに喜んでもらって、所得が向上して、それがまた自分に返ってきたときに次のやりがいがある生まれるということだと思います。私は元魚屋なんですが、商売をやっている、まずは所得向上ですから、儲けなきゃだめ。企業というのは、やっぱり儲けなきゃだめだと私は思っています。

ただし、がむしゃらに働いて利益を追求するだけでなく、生活の在り方ということも考える必要があると思います。ですから法人化なのです。法人化することによって、農業が、ワーク・ライフ・バランスがとれるような職業になってくる。所得は一人で儲けるよりもちょっと少ないかもしれないけれども、家庭も大事にしたいとか、自分の時間も大事にしたいとか、そんなことができる農業になってきた。そういうことは、私は今回、農業法人を立ち上げてつくづく思ったことです。

そして、そのなかでもう一つ思ったことは、今、ICTとかAIとか、これは今の若い人はすごく関心があって、いろんな話が出ます。ただ、初期投資がちょっと大変なので、なかなかすぐというふうにはいきませんが、これからは多分こういったことが、一人ひとりあるいは法人と法人の差を作っていくのだと思います。どれだけこういうことに関心を持って農業を進めていけるのか、今、深山さんが言ったように、ただつくるだけではなくて、経営ということにどれだけ自分たちが関心を持ってやっていけるのか、私は今回の法人の立ち上げで、社員に農業技術だけでなく、農業経営も学ぶことを伝えてあります。

なお、この法人の社長は、とりあえず私になっています。何もしないんですけど、ただ時折行っていることを言います。で、四人とも責任を持っていますから、「これ、どうなっているの?」とか、それは常に聞いています。将来的には、ここを最低でも10人の法人にしていきたい。そして、みんなが役割を分担して、また、いろんな話し合いができて、その中で回っていけるような法人にしていきたい。

とにかく儲かる農業にしたい。そのためには、これからAIもICTも必要だなと思っています。

(井熊) ありがとうございます。

非常に力強いお話で、儲かる農業というと、ある種、勘違いというか、儲けのための農業という話と儲かる農業って、根本的に違うことかなと。今の古口町長のお話は、自分がつくったものが売れて、それがお客さんからフィードバックがある。一つの職業としての喜びというか、儲けることによる職業としての喜び、それをつくっていかないと、やる人はいないよという、そういうような話かなと思います。

それからあと、深山さんのお話と共通しているのは、やはり法人化というものはいろんな意味でもう必須条件になっているということかと思っています。

さて、小谷さん、やはり楽しいだけではだめみたいなお話もありましたけれども、儲かる農業をどう実現できるのかということで、その辺の小谷さんのご説明を含めてお話いただければと思います。

(小谷) 私は全く違うことを言っているとは思ってなくて、楽しい農業が大事だと思っていますけれども、儲からなくていいとは一つも言ってないわけで、わが社の社是は儲かることです、という会社に誰が入りたいですかという話なんですね。儲けるのは当たり前のことです。ですので、対立した意見ではないと理解しています。

私が思う大事なことというのは、もちろん、儲かることもそうですが、やっぱり農村に賑わいを生むことが大事だと思っています。ですから、デジタル化なりいろんなテクノロジーを駆使して、最終的に農村が盛り上がるのが大事なわけで、それには一つの視点として、国は輸出で農業を盛り上げようとか、あるいは地方の人は東京に物を売りたいというイメージが多いですけども、それだけではないんだと。これからの時代は、来てもらう、見てもらう農業、農村という視点が大事だと思っています。

輸出ももちろん否定はしません、頑張っしてほしいけれども、インバウンドが3,000万人来る時代に、国産を、地域のをちゃんと食べさせるような仕組みや土台づくりも大事なんです。同じように、わが村に来た方に、わが村のものを食べさせる視点が大事です。もちろん、道の駅で地元の物を売るとか、農家レストランとか地産地消を理解するレストランやお店の人と連携していく。地域丸ごとになっての六次化みたいな、そんなイメージで儲かる農村になっていくのがいいと思っています。

(古口) ちょっといいですか。今、もう一つ課題が出てきたので……。

私は町長なので、できれば、新しく入ってきて就農した方に、その地域の農村の活性化をしてほしいとずっと思っていたのですが、最近、これもちょっと違うと思います。

というのは、農業の振興で農村の振興を図る、活性化を図るみたいなことが言われますが、私は、新しく入ってきた農業者とか、それから一生懸命やろうとしている若い人に、その地域の活性化まで担わせるというのは、これはちょっと酷だと思います。まずは農業者の所得向上とか生産拡大とか、そのことに没頭、集中してもらおう。私はそれがいいのかなと最近思うようになりました。

新しく来た人に農村地域の活性化といった役割まで期待する、担わせるというのはいかがなものかと思いつく思い始めて。まずは、みんな、農業頑張れ、自分の生活をちゃんとしろよ、子どもにいいものを買ってやれるようにしろよと、それが最優先ではないでしょうか。

(井熊) ありがとうございます。

深山さん、農村に行かれてどうですか。まずは儲かることに集中しなくちゃいけないのと、あと、コミュニティとどうつき合うかみたいところで。

(深山) まさに今のお話のようなところを、実は、私もこの2年、3年で経験しています。実家に帰ってきて、初年度はとにかくにも、町長がおっしゃったように、死ぬほど儲けないといけないということで、がむしゃらにとにかくお金を稼ぐことだけを考えてやってきました。それで、初年度はそれなりの収益を上げることができました。その上で、自分なりに感じるが出てきたんですね。

1年やって、儲かった。ただ、それだけでいいのかなという疑問が心の中に芽生え始めて、で、地元をみると、おじいさん、おばあさんしかいない。働く場所も、その集落ではうちしか法人がない。もともと弊社の地元は大きな会社さんの企業城下町だったので、そこで働いていた人たちしかなくて、もはや会社はないんですね。だから、雇用の場がない。

そうなった時に、自分にある程度金銭的な余裕ができたので、では、次に地域貢献しようというところで考えが切り替わりまして、それで会社2期目、3期目に、地域貢献やろうとか、地域から飛び出して大阪、神戸の会社とコラボレーションしようか、というふうに少しずつ考えが変わってきたところですね。

(井熊) 今の古口町長と小谷さん、お二人、私は言っていることのベースはそんなに差はないと思うんですけども、ほんとに深山さんの今の発言はお見事というか、全然事前調整したつもりはないですけども、ちゃんとまずは衣食住足りて、それから地域のことを考えよう。非常に見事なお話をいただきまして、どうもありがとうございます。

三輪さん、今、農村で儲かる農業を実現できますかということで、いろんな意見がある。やはりそこでちゃんと生活を支えられるだけの職業として成り立たなきゃいけない。その上で、古口町長にも当然おありになりますし、小谷さんにもあるように、農村がもっと魅力的な地域になってほしい、それにつながってほしい、というようなことのお話がありましたけれども、いかがですか。

(三輪) 私も、今、モデレータの井熊さんがおっしゃったのと一緒に、古口町長と小谷さんがおっしゃっていることは一緒なんじゃないかなと感じました。結局、農業者もしくは農村で暮らす人に対して、ある一つの枠を勝手にはめてしまうというのが、今、我々が一番やってはいけないことじゃないかなと思っています。

農家のご出身の方でも、ずっと農業をやってきて、農業は素晴らしいものだから儲からなくても仕方ないよねとか、農業で儲けるのは下品みたいな話があるわけですが、これってまず違うだろうなど。やっぱり職業として誇りを持って稼いでもらいたいなと思いますし、一方で、先ほど、深山さんが1年目はしゃにむに働かれたということですが、それを何十年も、単に朝から晩までブラックな企業のごとく労働者としてずっと働けというのも、これも違うと思うんですね。

やはり儲かることと楽しさという、両方が味わえるのが農村だと思いますし、その二つは都市だともしかすると対立するのかもしれない。都市では趣味に生きる人と仕事に生きる人と分かれてしまうのかもしれないですが、農村では両立できるような、何かそういう懐の深さがあるんじゃないのかなというふうに感じました。

(井熊) どうもありがとうございました。

まず一つ目のテーマ、儲かる農業は実現できるのか。それは、いろんな試行錯誤があるかもしれないけれども、古口町長が言われたように、儲けるようにしないといけないんだ。今、こういう意識が農業に従事している方、それから農村でも大切なのではないかなと私は思いました。

さて、二つ目のテーマのポイントでございますけれども、農村の魅力、先ほど、小谷さんのプレゼンテーションなどで既にやってもらいましたけれども、もっと魅力を積極的にアピールすべきではないのか。今までは農村の苦しさがどちらかというと説明されてきたわけですけど、先ほどの三輪さんのプレゼンにあったように、今、農村が復活できるかの分水嶺であるのであれば、その魅力をもっともっとアピールしていかなきゃいけないんだという点でございます。

そういった意味で、皆さんからどんどんその辺の、こういうところをもっとアピールできるのではないかということをお話いただければなと思いますが、まず、三輪さんからその思いをお話いただければと思います。

(三輪) 先ほどプレゼンさせていただきましたが、やはり一つ思うのは、農業、農村って本当に素晴らしいんですけども、言い方は変かもしれませんが、農村は農業のためのものだ、というところに押し込めているから、農村のいろんな魅力やいろんなポテンシャルを実は潰している部分があるんじゃないのかなと思います。

もちろん、農業というのは食料供給の重要な役割を果たしていますけれども、先ほど、私のほうでお話しさせていただいたように、農業をやっているときというのは、まさに地域で暮らしていることなので、地域の生活を支えているわけです。農業は農業、生活インフラは生活インフラ、生活サービスは生活サービスと分けていることが、実は今、農村の魅力を半減させているんじゃないのかなというふうに感じています。

先ほどのように、農産物を持っていった帰りに地域のを運んであげれば、地域の宅配事情は大きく解決しますし、稲田さんのようにドローンを飛ばせば、ドローンで、例えば法的な解釈とかいろいろ考えると、農作物しか見てはいけないとかというのが場合によってはあるかもしれない。他の人のところを撮ってはいけないというのはあるのかもしれないですが、ただ、地域で欲しているものは、農産物の状況を見てほしいし、先ほどのようにイノシシを見つけてほしいし、場合によっては遭難者を捜してほしいとかあるわけです。

農業から何かというだけではなくて、地域の課題を解決するときに、農業でやっていることがどう使えるのか、そういうような視点があれば、実は、農業の発展がそのまま農村の魅力に再度スポットライトを当てることに直結するのではないか。その間にある壁を何としても取り除かないといけない。その一つのツールがデータの活用とかデジタル化というところだと思いますし、もう一つがその地域の人と人のつながりなんじゃないか。このうちの欠けているデジタル化をこれから何とかできるんじゃないのか、というのが私の今の思いです。

(井熊) ありがとうございます。

ではまず初めに、稲田様ですが、ドローンのパイロットということで、いろんな分野で活躍されていますし、いろんな地域に行かれているということで、今、三輪さんが言われたデジタルの活用とか、あるいは農村の魅力、それについてコメントいただければと思います。

(稲田) 私、農業のこともあまり詳しくないですし、地方に行くとはいえ、農村自体、あまり詳しい者ではないんですけども、魅力というのは何かかなと思うと、ドローンの映像って、皆さん、もうたくさんごらんになっていると思うんですけども、私もいろいろ見るんですけど、ドローンの映像はすごく似通っているんですね。

どこの風景を見ても、広い家があって、森があって、農村があって、畑があってとか、割と似通ってきていて、よくも悪くも誰でも撮れるようになって、割と珍しくなくなってきている。農村の話からちょっと外れますけれども、土俵を変えるジャンルのものを何か織りまぜる、みたいなのを結構意識して日ごろやっています。デジタルの話に関して、別のジャンルを組み合わせてみたいなのは結構有効だなと思っています。直接、魅力どうのこうのというより、何とまぜるかみたいなのはずっと考えることが多いですね。

(井熊) ありがとうございます。

今のお話は、農村の魅力というより、むしろ、革新技术みたいなものをどうやって使っていくのかという観点で、技術だけではなくて、何を組み合わせてハイブリッドしていくのかという、そういうお話だったと思います。

次に、深山様、まさしく都会で毎日ネクタイを締めてご活躍されていたなかで農村に行かれて、農村の難しいところ、あるいは魅力、いろんなことをお感じになっていると思うんですけども、それについて少しお話をいただければと思います。

(深山) 農村の魅力というと、みんな、すごく純粋なんですよ。汚れてないということ、ちょっと言い方が変ですけども、純粋無垢なんです。新しいことを知らない、人とあまり交わったことがない、非常に純粋なんです。それがすごく魅力的だと田舎に帰って思うところですね。

ちょっと話がずれてしましますが、それを発信する場が今までなかったし、現状でも、実はあまりないような気がしています。SNSでどんどん発信できる世の中になってはきているんですけども、実は、弊社のある場所は非常に田舎で高齢者が多いので、半分ぐらいが携帯もガラケーなんですよ。それをスマホに変えたらもっと楽しいよ、情報を入力することも楽しいし、発信することも楽しいよということで、いろいろと話をするんですが、ある意味、純粋無垢で新しいことに対して臆病なので、私はいよいよ、というふうになっちゃうところがあります。

それを私は変えてあげたいなということもあって。みんなの生活を無理に変えるというのは恐らく無理だろうな、でも仕事を変えてやれば強制的に変わるのではないかな、と思いもしました。

つまりどういうことかということ、弊社の場合、農業ですので、ハウスが遠いんですね。点々としておりますので、実は、みんながコミュニケーションをとるすべがないんです。朝、朝礼で挨拶した後、お昼御飯ぐらいしか、みんな顔を合わせる事がなくて、コミュニケーションがとれない。そこで、やはり出番になるのがスマホのチャットのツールですね。LINEみたいなもの、弊社の場合はChatworkを使っていますけれども、チャットのツールを使わないとコミュニケーションがとれないよと。コミュニケーションがとれないと仕事ができないよ、というふうにしてあげることによって、60代、70代のみんなも強制的にスマホを使うようになる。

で、スマホを使い始めると、もうそれで仕事は一丁上がりですね。YouTubeを見始めたりとか、SNSで発信し始めたりとか、そういったことをどんどんして行って、もともとは仕事だったんだけど、最終的には、何かわからないけれども、生活が変わってきたということになってきます。

で、弊社の社員が変わってきたら、田舎というのは結構狭いところですので、隣のおじいちゃんがスマホを使い始めたとなったら、さらにその隣のおじいちゃんもスマホを使い始めるんですね。都会でしたら、私もそうでしたけれども、マンションの隣の人が何をやっているかというのはわからないですし、興味もないんですけれども、田舎というのは結構隣を見えています。

何が言いたいかというと、農業という仕事から新しい技術、デジタルトランスフォーメーションを導入することによって、農村のみんなの生活が変わる。それでみんなの生活が変わったら、横の人の生活も変わる。そうすると、みんなが情報の発信をし始める。情報の発信をするコンテンツというのは、意外とみんな持っているということで、これから私みたいな農業経営者が都会から田舎に行って、田舎を変えることによって、この1年、2年、5年ぐらいで田舎からの発信が増えてくるのかなというふうに思っています。ちょっと答えになってないですけど。

(井熊) 非常にそこにいる方の純粹さとかいいところは、もちろん、自然なんかもいろいろあるんだけど、発信力が弱いんじゃないかということで、発信力を培ってもらうために会社としてまずチャットから入ってもらう。で、チャットを使うことによって、個人のSNS的なものでの発信力を高めていこうというような取り組みで、少し余裕が出てきていらっしゃるのかもしれないですけども、儲かる農業から一歩出た感じがいたしますよね。

さて、小谷様、農業の訴求のポイントとかというんですが、先ほどのプレゼンでは言い足りないようなところがあれば、バシバシ言っていただければと思います。

(小谷) ちょうど事例を一つ持ってきたので、スライドをご覧ください。

以前、島根の中山間地に行ったんですね。こちらの左上の黄色いものは、デンマーク製の除草ロボットで、400万円もするものです。今、国産はいろいろ開発中ですけども、まだあまりいいものがない。これは斜度45度まで対応できるという自走式のロボットでした。

そのときに、中山間地にいる方というのは、みんな、高齢者なわけで、言葉が印象的で、「杖をついて田んぼの見回りはできるけれども、杖をついて草刈りはできない」というふうにおっしゃいました。高齢の農家は70歳、80歳になっても、杖ついてでも田んぼの見回りをしたい、せっかくのモチベーショ

ンを上手に生かす方法はないのだろうかと思えます。

あるいは、耕作放棄地の解消に、ヤギが役立つと言われていています。これは岡山の美作の例ですが、実際にヤギを放ってみたところ、除草能力より癒し効果があると感じた。つまり、ヤギさんがいるねということで、引きこもっていた近所のお年寄りが心配して見に来たというんですよ。総合的にみると効果は悪くないんですよ。お年寄りの散歩の理由にヤギさんが活躍してくれた。

そういうふうに広い視野で見ると、介護・見守りヤギロボットみたいなのを開発してほしい。草刈り能力はそこそこだけど、かわいがりたいという感情が人間にはあるんですよ。つまり、ペットロボットと一緒にですね、aiboみたいな。そういうかわいがりたいという動機や、山羊はやっぱり生き物だから、何かあると首が締まって大変とか、いろんな問題があるので、関わる人間の心を動かすようなロボットが生まれたらいいなと思っています。だから、合理性、経済性もいいんだけど、何か今やっているお年寄りがやる気になるようなことですね。MY DONKEYが、収穫するたびに後ろをついてくるとかかわいいみたいなことですね。



(井熊) ありがとうございます。

今、農村の魅力をもっと発見するというので、皆さんからいろいろご意見をお伺いしたんですが、古口町長から何かコメントいただけますか。

(古口) 私の町でも、発信力が弱いのは確かです。これはいろいろな人に言われる。だから、役場の職員にも、そういった農村の発信力をもっとと言うんですけども、役場の職員もなかなかできないでいる。ですから、これから発信力をつけるというのは非常に大事なことだろうなと思います。

ただその一方で、農村の魅力を見つけるのは、ひょっとしたら、私どもだけではなくて、それは都会の人なのかもしれません。ですから、もし都会の方が茂木の町に来て、農村のそういった魅力を発見していただけたら、そういうことを逆に都会の皆さんにも発信していただきたいし、もっと進んで言えば、茂木町に来て癒された、農村、田園風景が美しい、山が美しいと思ったら、ぜひお金を落としていただきたい。それだけの対価を払っていただきたい。

要は、実はお金にならない農作業ってたくさんあって、イノシシが出るから山をみんなできれいにしなきゃならないみたいな、山をきれいにするんだけど、イノシシが出ないために山の下草刈りしているのか、あるいは隣のところも耕作放棄地、向こうも耕作放棄地、おじいちゃん、おばあちゃんしかいないから、そこもやってあげますよ、みたいな。でも、そうやって農山村の景観を保っているんですね。

都会の人はちょっと田舎に来て、1日、2日見て、ああ、よかった、よかったと帰ってもらうのもありがたいことなんですけど、ぜひ、何らかの対価を落としていただければありがたいと思っています。

(笑)

(井熊) どうもありがとうございます。

深山さんのほうから、農村自体の発信力というのもありましたけれども、私どものように仕事で関わって、東京とか、関わっている人がもっと発信しなくちゃいけない、それはそのとおりかなと思いました。

うちの研究員も恐らく農村が好きなのだろうと思うんですけども、あまり会社にはいなくて、三輪は委員会によく出ているので、いないのはわかるんですけども、他の人もいないので、今日はどこに行っているんだと聞くと、茂木町だという。よく行っているんですけども、その割には発信が少ないということかなと思います。

(古口) そのとおりですね。

(井熊) 少し反省をして、発信を高めてまいりたいと思います。

いずれにしても、先ほど、小谷さんの話であったんですけども、これから日本もグローバル競争のなかでだんだん厳しい世の中になってきますけれども、農村が元気であるということが、都会の元気にもなるというのは、私も本当にそうだなと思うんですよね。その意味で、農村の魅力を内側から発信、それから行った人も発信、というようなことをもっと心がけていかないといけないなと思いました。

では、次にメインのテーマかもしれませんが、農村がデジタルトランスフォーメーションの起点になれるのではないかと考えています。職業柄、他の分野にもいろいろ、エネルギー、交通、インフラなどに関わっておるんですけども、今、どの分野でもこのDX、AIとかIoTの活用というのは、もう死活問題になっていると思います。

でも、例えば、今、私どもでも自動運転の交通サービスの事業なんかもやっているのですけれど、非常に規制とかいろんな利害関係が多くて、新しい技術をなかなか導入できない。いろんなステップが必要だというのがあった。

そういうことから考えると、農村の強みって、一つは自由度かなというふうに思います。農地というのは、そもそも私有地ですから、そういったなかでの活動ですとかいうようなことがあるかなと思います。

あともう一つは、先ほどの前半の三輪さんのプレゼンテーションにもありましたけれど、デジタル技術だけが何も目的ではないんだ、デジタル技術が価値を生み出していくためには、それがコミュニティの中に浸透していかなくちゃいけない、というような部分があるかな、と思っています。

その意味では、農村というのは人のつながり、そういったものが強い。実は、これがITを活用していくときのこれからのポイントになるのではないかなと思います。

よく中国に行っているんですけども、IT、ハードウェアも進んでいるんですけども、今、中国からこれを教えてくれと言われているのは、ハードウェアとかの話は彼らも大分自信を持ってきているので、聞かれることは少なくなってきて、多いのは日本の社会の仕組みとか、コミュニティであるとか、そういうソフト的な部分を含めた仕組みの在り方というのを教えてほしいというような話なんですよ。

日本人というのは、そここのところの、日本社会の持っているソフトの魅力にあまり気がついてないのかもしれない。先ほど、三輪さんのプレゼンテーションの最後のほうであった、DXを日本から海外に展開していくというときに強みになるのは、その部分かなと思っています。デジタル技術というのは、技術的には各国共通していますので、どこで差別化していくかということ、実はそのコミュニティの部分だった、ということならばそれは非常に大きいかなと思っています。

そうしたことから、農村がDXの発信拠点になる。その根拠として、一つは自由度の大きさ。もう一つは、地域としてのまとまり、コミュニティの強さ。そういったようなところを念頭に置いて、DXの起点となれる可能性ということについて、皆さんからコメントをいただければと思います。

では、トップバッターは古口町長からお話をいただければと思います。

(古口) 先ほど、三輪さんのお話を聞いて、このDXというのは、初めて私は聞いた概念なんですけど、一体これからどうなのかなという思いも実はしています。

それで、今、コミュニティの話も出ましたけれども、逆に、我々のところに入ってくる若い人たちのなかでは、そのコミュニティが煩わしいと感じている若者もいます。そういう中で、このDXというのがどういうふうな役割を果たしながら農村のなかで広がっていく、あるいは農村の活性化に貢献しているかというのは、今すぐにここでコメントできません。先ほどからずっとそれを考えているんですが、まだなかなかその概念がつかめていないというのが本音のところですよ。

(井熊) 古口町長のところでは、茂木町の美土里たい肥という事業をやられていますよね。ちょっとその辺を紹介していただければと思います。

(古口) 茂木町では、平成14年にできた新たな法律に基づいて、牛糞の処理が大変問題になりましたので、平成15年に町の酪農家15軒の牛糞をまとめて堆肥化するという事業を始めました。中に入っているのは、牛糞、オガ粉、籾殻、枯れ葉、そして町の中1,600世帯の生ゴミです。この生ゴミは家庭で分別

していただき、トウモロコシでできた袋に入れてもらう。それを町が収集しています。今は、竹も入れています。

そして、一昨年、茂木町に那珂川という大きな川があるんですが、ここに生鮭が上ってくるんですね。この鮭は役割を果たすと廃鮭となって河原にごろごろ転がっているんですよ。この臭いがひどいというので、漁業組合にお金を払って全部回収してもらい、これも堆肥化しました。堆肥化すると、必ずその堆肥の分析をしてもらっていますが、大変いい堆肥ができています。

これこそコミュニティがないとできない事業で、町の誇りです。小学校4年生は必ず一度ここに行って、自分たちの出したゴミがどうなっているかを見る。これを堆肥化して、その堆肥がどういうふうな農村に還元されて使われて、またその田畑で作られた米や野菜がみんなの所に戻ってくる。その循環を学習してもらっています。

この美土里たい肥が茂木町の農業の基本です。ですから、今回立ち上げた農業法人も、美土里農園ということになっています。

(井熊) 私は廃棄物の仕事を結構やってきて、茂木町のこの堆肥をつくっているところにも行ったんですけども、堆肥をつくって、普通はどういうところに使うかということ、植栽に使うんですね、街路樹とか。なぜかということ、堆肥の質に問題があっても、さほど大きな問題にならないからです。

こういう一般の廃棄物を使った堆肥を、農業に使えるようにするには、そこまで堆肥の質を上げるのが結構難しいことなんですね。それが住民の参加型でできているということがすごいなと大変感心しました。そういうところで、おじいさん、おばあさんが、山から落ち葉を拾ったり何なりして、その堆肥づくりに参加をしている。

もし、このつながりなしにデジタル技術だけでやれといたら、たくさん監視カメラを入れたりセンサーを入れたりして、堆肥の質を確保しなくちゃいけない。コミュニティがあるからこそ、こういうようなものができるんだというような強さの例として、今、お話をさせていただきました。

(古口) せっかくその話が出たので、これの維持管理について。

当初、設備をつくる時にはたくさん国から補助金をいただいてありがたかったです。その後、国のモデル事業として認定されました。大変いいということで、全国から視察も来ています。年間4,000人ぐらいの視察を受け入れているんですが、やはり生ゴミとか牛糞を入れるので、施設の傷みがすごく激しい。5年もつところ、3年、4年でまた補修をしなければならない。こういうお金は、ぜひ国のほうでも何か見ていただければありがたい。

先日も地方創生で安倍総理から茂木町の取り組みが表彰を受けました。賞状もいただきました、盾もいただきました。でも、賞状も盾も要らないんですよ。欲しいのはお金です。(笑) このことを一言だけ申し上げておきたいと思います。

(井熊) 本日、国の方が来られている可能性も多分にあるんじゃないかと思いますが、その場合は、ぜひ今の古口町長のお話をお聞きいただければなと思っております。

どうもありがとうございました。

私も堆肥の現場には何回も行ったことがあるんですが、とてもすぐれたプラントだなと思いましたので、ぜひ皆さん、お時間があつたときには行っていただけると、感心する部分も多いんじゃないかなと

思います。

それでは、小谷様、これからこういう革新技術というのは農村でも不可欠になってくると思うんですけども、農村の強みとしての自由度とか、あるいは農村の文化、そういうところについてご発言いただければと思います。

(小谷) 今、国でも、日本農業遺産といって、もともとFAOが歴史的な農業システム、伝統的な農業システムを次世代に残すべき、というふうに評価してきた世界農業遺産というのがあります。日本には11カ所あります。世界中に56カ所なのに、何と日本に11カ所も認められているんですね。中国が15カ所で1番だそうですが、国土の大きさからすると、日本に何と11カ所残っている。その一つが、私のいた能登もそうです。能登の段々、棚田の里山里海システムですとか、あと、先ほど、コウノトリの話が出ましたけれども、新潟佐渡ですね、トキと共生するコメづくりというので、まさに減農薬や化学肥料を減らして、いわゆる自然環境保全型の農業が農家によって進んでいるということです。

農村の文化的価値というのは、日本人より、むしろ外国人のほうがおもしろがったり、興味、関心を持ったりしているというふうに思います。ただ、都市の人もこれからは農村にツーリズムで行く時代だなと思っています。

そういうなかで、バリ島の世界遺産になっているジャティルイの棚田という、村中が棚田になっている有名な棚田があるのですが、そこに小水力発電がありまして、その小水力発電に掲げてあったプレートに富山シティと書いていたんです。つまり、富山も中山間地も多いですし、小水力発電も盛んですので、その日本のシステムを、むしろ、外国に輸出といいますか、外国に協力をすることができると思いました。

答えになりませんが、農村の文化的価値を、広く外に見せていくことが大事だと思っています。

(井熊) 日本でできたものがそういう遠いところで利用されているというのは、大変すばらしい話ですよ。

では、稲田様、ドローンを使っていると、まさに実際に農村の強みというのがあると思うんですけども、それについてお話しいただければと思います。

(稲田) ドローン絡みでいきますと、ドローンは航空法で縛りがあるんですけども、どうやっても都市部で飛ばしにくい、飛ばせない環境があるので、そもそも地方でないと活動のしようがないみたいな状況があります。でも、不思議で、今までITとかウェブとか、いろんな進歩してきた技術がありますけれども、地方発信でやれる技術というのは、ドローンが初めてじゃないかなとちょっと思っています。都市部ではどうしようもないというのがあって、そこはもう圧倒的に優位性があるなというのは一つ感じています。

それもあって、私は熊本に住んで、いろんな現場に行きたいし、行っているという状況なんですけれども、これからちょっとずつ都市部に攻めてくると思うんです。逆に言うと、今まで流行りというのは都市から地方に行ったのが、真逆でしかやりようがないというのもすごくおもしろいなと思っていますし、インターネットでいろんなデータがパソコンの中に入っているという状況で、パソコンの中に入っていないデータというのは、逆に言うと、地方にしかない。要は、インターネット上に入っていない、デジタルになっていないデータをこれからどう入れていくかみたいなのは、どうやってもフィールドが農村

にしかないので、行かざるを得ないみたいなものを感じています。

ドローンは将来的にはやるだろうなとは思っているんですけど、まだ時間がかかるなというか、これが今すぐタケコプターになるとはなかなか思いにくい。けれど、いつかは絶対タケコプターになっているんですよ。

それを考えると、電話の流行ってきたタイミングというか、流行り方というのはすごい参考になると思っていて、昔、村とか集落に1軒だけ電話を持っていたみたいなのがあるじゃないですか。「となりのトトロ」のメイちゃんが行方不明になって電話を借りに行くみたいな。そういう時代があって、今はもう皆さんポケットに入っているとすると、技術というのはやっぱりそういうペースで進んでいく。ちょっとずつ核となる人がいて、その人が貸してあげて、ちょっとずつ便利だねとなって、そこからだんだんユーザーさんが増えて、価格が下がって、小型化してみたいな流れになると思うんです。

デジタルというのもそういうものなので、今はこれ（机上のドローン）はこのサイズですけど、絶対ポケットに入るタケコプターになるので、先に地方でしか使えない、どうやっても地方にしかないデータがある、今はでかいけど先にやったほうが絶対得だよな、みたいなことをちょっと思っていたりします。

(井熊) ありがとうございます。

ドローンみたいなものは地方発にしかないということでしたが、こういうものって実は結構あって、自動運転の仕組みなんかも、いろんな車が走っているこの都会なんかでやるより、地方のほうがずっとやりやすいとか、そういったものがあるかなというのが1点。あと、まだデジタル化されていない情報が非常に豊富にある。将来的にドローンがポケットに入る、そういう時代が来る。確かにホバリングがすごい安定してきて、カメラが高性能になってくると、そういうこともあり得るかなと思いますが、そういうときに、農村で一気に普及して、大きなブレークスルーが起こるというようなお話だったと思います。ありがとうございます。

(稲田) ちなみに、小さくなる話でいくと、今日持っているこのドローンと同じ性能のが、2年前は1.3kgあったんですよ。2年たって今は900gです。なので、性能と重量でいくと、そのペースでは減っていますね。

(井熊) もう数年たったら、大きさも重さも全然違うというようなことですよ。ありがとうございます。

では、深山様、農業に転じられて、いろんな技術を取り入れられて農業経営をされているという、先ほどご紹介がありましたけれども、そういった意味で、農村が革新技術の起点となるという点について、いかがお考えでしょうか。

(深山) 先ほど、稲田さんからお話があったように、ドローンなんかは地方発信でしかあり得ないというお話だったと思います。ちょっとデジタルとは違うんですが、おいしいものも現状の日本では地方発信でしかあり得ないのかなと捉えています。少し話がかわっちゃうんですが、ここから数年で、もしかしたら東京でおいしいものが食べられなくなる時代が来るんじゃないかなと、実は危機感を抱いていることがあるんですよ。

ということかというのと、うちでいうとシイタケなんかは生鮮品なわけですよ。生鮮品は非常に足が早

いので、どうしても冷蔵便で送らないと新鮮なまま届かない。特に東京に送るためには冷蔵は必須です。キノコ以外も、やはり地方にあるおいしいものというのは、冷蔵で東京とか大阪に届けたいという思いは、みんな持っています。先ほども申しあげましたけれども、地方のみんなというのは、ある意味まっさらなので、いいものを欲して下さっている方に届けたいという思いはみんな持っています。だから、東京に送りたいという思いはあるんですが、実は今、送れない現状が正直ございます。

農林水産省の皆様が、技術ですとか、農地の問題とか、いろいろ頑張っているのはよくわかるんですが、農水省さんだけでは解決し得ない問題というのも農業の現場で起きていると感じるところがございます。

具体的にどういうことかという、足が早いので冷蔵便で送りたい。もともとは宅急便で送っておりました。ヤマトさん、佐川さん、ゆうパックさん。東京にも安く送れておったんですが、この1年、2年で、実は、シイタケ自体よりも送料のほうが高い。1,500円のシイタケを東京に送るのに送料が2,000円かかっちゃう、という現状が出てきてしまっております。

もともと2年前までは東京駅、新宿駅、銀座の百貨店に弊社のシイタケを並べておったんですが、2年ほど前にもうすべてやめざるを得なくなりました。どうしても物流の問題があつてですね。それを解消するために、地域でいいものをつくって、都会のほうに届けたいのでという思いはみんな持っているんで、例えばうちの会社で物流便を持つ、冷蔵車を買おうということで、動いたことがあるんですね。結局、今できていないです。

なぜかという、うちが野菜を東京、大阪に届けようとする、結局、運送業になっちゃう。運送業になるということは、緑色のナンバーをつけないといけない。そうすると、5台以上の冷蔵車が要る、という法律的な問題があるということをお聞きされて、私の思いとしては、いいものをみんなつくっている、で、東京、大阪の方はいいものを食べたいと思っている、それを解消するために物流は絶対まともないと意味がないので、まともやうということで動いたんですが、結局、5台もトラックを購入しようとする、もはや農家ではなくて、ただの運送業者になってしまうというところで、結局、断念したことがございます。

話が半分ずれてしまったんですが、農村でいいものをつくって、それぞれデジタルトランスフォーメーションで情報を皆さんに届けることはできるようになってきてはいるものの、結局、情報と物の流通、両方がうまいこといいものが届くんだけれども、物が届かない状況というのが恐らくこの1年、2年、3年、5年ぐらいいは出てくるのかなというのが、今、現実問題、農村で生きている立場として感じているところですね。

(井熊) どうもありがとうございました。

先ほど、前半で三輪さんが言った流通のマッチングはできないというか、具体論としてはかなりハードルがあるというお話ですね。どうもありがとうございました。

最後、三輪さん、皆さんのお話を受けて、農村が革新技術を利用する起点になるんじゃないかということについて、お話をまとめていただければと思います。

(三輪) 稲田さんがおっしゃったことは、私もまさにそのとおりだなと思っていて、ドローンって都会では飛ばせないよねと。他のものもそういうようなものはたくさんあるのだと思います。先ほど、

井熊さんのほうからも少しありましたけれども、国内で自動運転のモビリティが走っているのはどこかという、農地なわけですね。それが、先ほどお見せいたしました自動運転トラクターもそうですし、小型の農業ロボットもそうです。

なので、実は、これから日本の社会がいろいろと直面していく課題を解決するための、最初に課題にぶち当たるのは農村だと思いますし、農村だからこそその許される自由度というのがあるというのも重要なのだと思います。

これから先のデジタルトランスフォーメーションのテストベッド、実験台という言葉は好きじゃないんですけども、パイオニアとしてチャレンジをしてもらえるのが農村だし、そこに対しては都市の人間も、いろんな技術もそうですし、資金もそうですし、どんどん投入していくべきなのかなと思いました。

もともと農業というのは人と人とのつながりから生まれてきています。私もよく、週末、作業を手伝いに来いと農業者の先輩方から言われるので行きます。困ったときはそれぞれ助けるんです。違う作物をつくっていても、一番忙しいときは一緒に種をまきに行きますし、田植えしますし、収穫もしに行くんですね。そういうふうなところは、ビジネスという形で格好いい言葉にしていくと、シェアリングエコノミーという言葉になるんだと思います。

先ほど、町長がおっしゃられたような、今、あれだけすばらしい堆肥化の施設がある、その維持・補修が問題になっている。まさにそういう次の連携とか、地域のつながりがあった上で出てくる課題を潰すのがDXなんじゃないのか。

例えば堆肥化の施設の延命とか、効果的な維持・補修というのは、まさにIoTの出番だと思います。予防的なメンテナンスをしたり、どこにひびが入りそうだとか、ひびが入っているかどうかを画像でわかるようにしたりとか、ソナーでわかるようにしたりとか、そういうような最新技術を使うことによって出てくるものは、よりいい美土里たい肥がこれから先も安定的に供給できるということになっていきます。

なので、DXというのは主役になるというよりは、皆さんがお話しいただいたような農村の価値とか農村の役割というものが邪魔されないように下支えするようなところ、そこが今、1番可能性がある部分なのかなというふうに強く感じました。

(古口) 三輪さん、ありがとうございます。それで、私も先ほどから国へのお願いとか言っていますけれども、実は、国のほうでは、平成31年度の予算で、私どものような中山間地域の予算とか、AIとかIoTの予算を結構新たに取り入れてくれているんです。これは大変ありがたいことだと私は思っているんですが、その一方で、これをどう利用させてもらうのか、生かさせてもらうのかということ、逆に我々地方が、今、問われているときじゃないかとも思うんですよ。

それには、やっぱり役場の職員がそういった情報をきちんと捉えて、そして、それを必要としている、あるいは欲しいと思っている農業者にきちんと情報を正確におろしていける、そういうふうな心構えで仕事に向き合わないといけないことを私は職員に言っています。今年は新元号になりますけれども、農業もAIとかIoTという新しい時代を迎える、そういうことを職員が意識することが必要だと思っています。

そのなかで、深山さんからありました物流、実は、関東にある私どもの町でも、今、この物流の問題については悩んでいるところです。都会の皆さんとどうやったらつなげていけるのか、これもこれから考えていかなければならないと思っています。

稲田さんには、ドローンを農業のハウス内で使えるように早くお願いしたいと思うんですよ。どうぞよろしくお願いします。

(井熊) ありがとうございます。

大分時間も迫ってまいりました。最後に、今、町長からちょうどいいタイミングでお話がありました。国のほうもAIとかIoT、そういうものを入れて、農業あるいは農村を革新していこうということで、政策に力を入れていただいております。では、誰がリーダーとなって、牽引役となってこういうものを引っ張っていけばいいんだということを、最後に皆さんからお話をいただければと思います。

では、深山さんのほうから、誰がリーダーとして引っ張っていけばいいと思いますか。

(深山) 私の立場で言うと、私がリーダーになるべきだろうというふうに思っていますし、その覚悟はあると思っています。

そのために必要なこととといいますか、普通に私が農村で生きていくようになってしまうというのがやっぱりあって、ホタルの飛ぶような田舎に引っ込んでずっとシイタケをつくっていますと、それこそ、DXという単語に触れることなんてまずないわけですね。こうやって、たまたま私はもともと東京大手町でお仕事をさせていただいておりましたので、こういったところに来させていただいて、いろんな企業の方、自治体の方と会話をする機会を頂戴しています。なので、まだ私は幸せなほうかなとは思いますが、私と同じように、地域、農村で孤軍奮闘している農業経営者あるいはリーダーになる候補の方は、皆さん、情報を渴望していたり、あとは、ネットワークを渴望していたりというのが正直なところだと思います。

ですので、皆様にお願ひできればというのは、私だけではなくて、各地にいるリーダーの方に少しでもコンタクトをとっていただいて、どんな情報でもいいので情報を提供してあげていただければな、というのが私の思いでございます。

繰り返しになりますが、リーダーは私がやろうという覚悟はしているところでございます。

(井熊) 非常に力強い言葉、ありがとうございます。

やはりそういう意欲のある人はいるんだけど、何か働きかけであるとか、ネットワークであるとか、そういったものが足りない立場におられる人がいる。そういう人をぜひ支援したい、そういうことでございますね。ありがとうございます。

それでは、稲田様、どんな人が革新技術のリーダーになっていったらいいのかということについてコメントいただけますか。

(稲田) デジタルトランスフォーメーションのリーダーということなんですけれども、ドローンでいくと誰でもリーダーになる可能性があって、私もまさにそれを肌で感じています。

南小国町というところの役場の方40名に講習しまして、まちづくり課の課長の方の例なのですが、もともとラジコン世代の方で、スマホとかタブレットとかITは苦手。ただラジコン世代だったから、ドローンはとても得意だということがわかった。ドローンでどうしてもスマホを使わないといけないので、

それがきっかけでスマホとかITにちょっと詳しくなって、という流れで、その方がリーダーになっていきました。

別の話でも、あまりパツとしなかった方が、実はゲームがすごく好きで、仕事ではそんなにキラッとしてなかったけれども、ドローンはすごくまいし、デジタルも強いということで、急にみんなに教える立場になったという方がいます。不思議なものだなあと、みんなで言っているんですけども、誰がどうなるかわからなくて、ドローンに関しては全員スタートなので、ゼロからなんですね。ヨーイドンでみんな始まっているので、全くわからない。逆に言うと、私も明日誰に抜かれるかわからなくて、びくびくしながら取り組んでいるみたいなのところもあって、必死でドローンをやっている。ライバルがたくさん生まれているので、みんなフラットに始まっている。

このデジタルトランスフォーメーションも、もしかしたら、誰がリーダーになるかわからない。テクノロジーの組み合わせ方一つ、思いついた人勝ちになる可能性もあるので、ちょっとわからないなど。みんな平等にチャンスがあるなというふうに感じています。

(井熊) ありがとうございます。

そういうやる気のある人をいかに発掘するのが大事だというようなことですよ。ITは苦手だけどドローンが得意というのは、何か非常におもしろいなと思いました。

それでは、小谷さん、いかがでございましょうか、どんな人がリーダーになっていくのか。

(小谷) さっき、ちょっとお話を受けて、リーダーの前に物流の話がありましたけれども、これからは人の交流の時代だなというふうに感じています。大交流時代にこそ、むしろ、農村の価値があると思っています。

その延長で行きますと、東日本大震災では一極集中のもろさというのが出たわけですよ。そうすると、一面的なことが脆弱なんだというのがわかったと思います。ですから、多様性ということが大事だと思います。

違う人種を受け入れ、いろんな考えの方を受け入れ、いろんなアプローチを認める、それが本当のダイバーシティ、多様な文化を受け入れるということだと思います。そういうしなやかな強さが最も大事なことだと思います。

以上です。ありがとうございます。

(井熊) ありがとうございます。そういうしなやかなコミュニケーション能力を持った人ということで、三輪さんにお伺いします。どんな人がリーダーかということで、いろんな意見が出ました。古口町長からは、やっぱり役所の方は頑張らなきゃだめだよという話と、深山さんからは、こうやって新しいところから来た人でリーダーシップの気概を持っている人、それから稲田さんからは誰でもあり得るということ、小谷さんからはコミュニケーターみたいな人、ということでした。これを踏まえて、締めコメントをいただければと思います。

(三輪) 今、皆さんからそれぞれ別のお答えをいただいた、すべてが当てはまるんだなとすごい勉強になりました。結局、DXって、いろんな人がいろんな角度から取り組まないといけないので、昔ながらのトップダウンでというふうなものでもないのだろうと思います。しかも、町長がおっしゃられたように、多分、行政の方はそういう場をつくるとか、逆に、そこに対する障害というところがあれば、国

のほうで解消していくことが必要だと思います。そういうふうなフラットな場であって、チャレンジできる場があれば、それこそ、そこの中にいる老若男女もそうですし、外から来られた方、戻ってこられた方が活躍するというのもあって、みんながリーダーになれるというふうな部分なのだと思います。

ただ、皆さんのお話を聞いて、一つ悩んでいるのは、私はずっと農業畑で生きてきているんですけども、まさにこういうようなDXと農作業において、なかの人材と外の人材とあるんですが、いつまで私は外の人材で、いつ中の人材になるべきなのかなと。ずっと農業技術をやっているんですけども、自分で農業、農業経営というのをやっていないので、深山さんと同じような悩みというのは、もしかしたらどこかのタイミングで出てくるのかもしれないなど。

ただ、今は小学生の娘がいるんですけども、いろんなことを考えると、特に親がサラリーマンだったので、深山さんのように思い切って戻って農業をやって、自分で農村DXを体現するということが正直できない部分、もどかしい部分もあるところなんですよ。

ただ、DXによってデジタル、いろんなものがつながっていく、もしくはノウハウがもらえる、もしくは先ほどあったように、いろんな農機とかをシェアリングしてみんなで使っていく。作業は、もしかしたら隣の人がアウトソーシングしてくれるかもしれない。デジタルによって橋渡し、いろんな人と人とか、思いと思いの橋渡しができれば、もしかしたら、例えば今は無理だけど、3年後には田舎に帰って、そこから向こう10年は農業をやって、その後、もう一回都会に出てきて働くみたいな、ステージ、ステージに合わせて自分が農業にチャレンジできるような未来というのが出てくるんじゃないのかなと。

今までの仕組みだったら、多分、私はずっとこのまま東京で生きて、引退してから田舎に戻るというふうな形になってしまうのだと思うんですが、そうじゃない、もっと早いタイミングで、自分の好きな農業にチャレンジできるようなチャンスが出てくるんじゃないのかなというのを、4名の皆様のご意見から少し勇気づけられました。ちょっと悩みが解決できたような気もするし、余計人生の悩みが深まったような気もします。

(井熊) どうもありがとうございます。ちょっと三輪さんの転職宣言かなと思ってびっくりいたしましたが、いろんな生き方があるということですね。(笑) ありがとうございます。

今日は、年度末のお忙しいなかにこのように多数の方にご参加いただきまして、ありがとうございます。また、パネリストの方々、本当にいろいろな角度のお話をいただきまして、ありがとうございます。

確たる答えが出たわけではありませんが、私ども、こういうAIとかIoTの革新技術を使った社会システムの変革というのは、非常に重要だと思います。この豊かな日本が今後も存続していくための不可欠の課題であるなと思っています。

そういった意味で、今後、地域というものがいろんな形でデジタル化されていくと思うんですけども、私は地方とか農村というところに日本の差別化の非常に重要なポイントがあるかなと思っています。例えば都市、いわゆるスマートシティとか、最近、政府ではスーパーシティというような言葉も使っていますけれども、この分野については、中国であるとか、アメリカであるとか、ものすごい勢いで進んでいる部分がある。そういうところは日本も大事なんだけど、やはり非常に厳しい競争がある。だけど、今日お話があったように、よい文化とかコミュニティを持った日本の農村、それから、非

常に高いクオリティの農産物を持った日本の農村、そういったところは、この革新技術を取り込むということには、ほかの国がまねできない日本の強みが私はあるのではないかなと思います。

そういったような問題意識で、今日はちょっとチャレンジングなテーマで皆さんにお話をお聞きすることができたと思います。その意味で、難しいテーマに関して、2時間、本当にありがとうございました。私自身、大変勉強になりました。

皆さん、最後に、パネリストの方に盛大な拍手をいただければなと思います。(拍手)

それでは、これでパネルディスカッションを締めさせていただきます。どうもありがとうございました。

(了)